

# 中国語結果構文と直接目的語制約

—英語・日本語結果構文との比較を通じて—

崔 玉花

キーワード：結果構文、直接目的語制約、非対格性仮説、固定表現、ゼロ代名詞

## 1. はじめに

結果構文に関する研究では、結果述語とそれに叙述される要素との構造的関係に関する問題が中心的なトピックとされ、これまでに叙述対象になりえるのは基本的に直接目的語に限られるという「直接目的語制約(Direct Object Restriction(以後、DOR) : Simpson(1983), Levin&Rappaport Hovav(1995), etc.)」が提案され、広く支持されてきた。一方、中国語の結果複合動詞(Resultative Verb Compounds : 以後、結果構文)の現れる文を結果構文の枠組で論じている研究では、中国語は DOR に従わず、目的語叙述も主語叙述も許すということが指摘されている(Cheng&Huang(1994), etc.)。そこで、本稿では英語・日本語との対照研究の観点から、中国語結果構文を再検討し、中国語においても DOR が一般的制約としてはたらいっていることを示す。

## 2. 問題の所在

### 2.1 結果構文とは

(1)に見るように、動詞が表す行為の結果として何らかの状態変化が生じることを表す文のことを結果構文という。

(1) a. She tinted her hair red.

b. 彼女は髪を赤く染めた。

c. 她染红了头发。

(1)の各文は、同じく「彼女が髪を染めることによって、髪が赤い状態になる」という意味を表している。このような意味内容を表す英語と日本語の結果構文は、それぞれ S-V-O-C と S-O-C-V の形式によって示される。一方、中国語では、(1c)のような前項要素で行為を表し、後項要素でその結果を表す複合動詞<sup>1)</sup>の形式が用いられる。この場合、下線を引いた

<sup>1)</sup> “染红”における後項要素“红”は他の言語では形容詞に分類されえる形態素であるが、中国語では形容詞を状態動詞と区別することが難しく、これを動詞と動詞の結合と見なす研究者が多い。

部分をイタリックで示した名詞句に対する結果二次述語 (resultative secondary predicate : 結果述語) と呼ぶ。二次述語というのは、文を構成するための必須の要素である一次述語「*tint/染める/染*」と対照したときの用語で、それは主動詞のとり項(主語あるいは目的語に当たる名詞句)に対して新たな叙述を付加する場合の述部を指す。(1)では、結果述語「*red/赤く/红*」が目的語「*her hair/髪/头发*」と二次的な叙述関係を構成している。

## 2.2 DOR の観点からの現象の観察

Simpson(1983)をはじめ、これまでの先行研究では結果述語の叙述対象になりえるのは D 構造の直接目的語に限られることを指摘しており、これを Levin&Rappaport Hovav(1995)(以後、L&RH)は、「直接目的語制約(DOR)」<sup>2</sup>と呼んでいる。DOR は、そもそも英語の結果構文に関して提出した一般化であるが、結果構文の多言語比較<sup>3</sup>が盛んになるにつれ、その通言語的な妥当性が問われるようになってきており、実際に中国語に関しては、それが成り立たないという指摘もある。

以下では、DOR の観点から日本語と中国語の結果構文を考察し、日本語では英語と同様、DOR が一般的制約としてはたらいっている<sup>3</sup>のに対し、中国語では DOR による説明が可能になる一方で、不可能になる場合もあることを示す。まず、DOR によると、他動詞を含む結果構文においては、主語の状態を叙述する結果構文はありえないという予測になる。

(2) a. She polished *the shoes shiny clean*. (他動詞)

b. 彼女は革靴を**びかびか**に磨いた。

c. 她擦亮了皮鞋。

(3) a. \*She polished the family's shoes *exhausted*<sup>4</sup>. (他動詞)

b. \*彼女は家族全員の靴を**クタクタ**に磨いた。

<sup>2</sup> 統語論では DOR を相互 c-統御或いは相互 m-統御という構造的条件を用いて説明しており(Carrier & Randall(1992), Takezawa (1993), Koizumi(1994))、L&RH は状態変化連結規則(The Change-of-State Linking Rule:51)を用いて DOR を解釈している。しかし、最近では英語にも DOR に対する反例が存在することが指摘されており(RH&L(2001))、また、DOR を批判的に論じているこれらの研究に対して、更にそれに対する反論が出されている。こうした DOR を巡る先行研究の論争については、齊木(2004)において詳細な検討がなされており、齊木も DOR を保持する立場を取っている。齊木は、中国語結果構文に見られる主語叙述を許す現象に関しては、結果複合動詞の主要部の曖昧性の問題と関連づけて分析している。詳細は、齊木(2004)を参照。

<sup>3</sup> すでに、Takezawa(1993)、Koizumi(1994)によって日本語も DOR に従うという指摘がなされている。

<sup>4</sup> ここで注意すべきことは、英語では「磨く」という動作が起こっている時の彼女の状態を表す状態記述 (depictive) の二次述部の解釈では適格文となる。それに対し、日本語では結果と depictive において形態的な対立が見られるため、このままの形態では状態記述の解釈が得られない。詳細は Takezawa(1993)、竹沢(2001)を参照。一方、中国語では結果と depictive の区別が構造的な位置の違い、つまり、前者は動詞に後続する補部の位置(補語)に現れ、後者は動詞に先行する付加部の位置(状語)に現れる、ということが Zhang(2001)によって指摘されている。

(i) a. 武松打**死**了老虎。 (resultative)  
 b. 武松**活**捉了老虎。 (depictive) -Zhang(2001:192-193)

c. \*她擦累了全家人的鞋。

(2)(3)は、日本語・中国語も英語と同様、「革靴を磨く」という行為によって「革靴がピカピカになる」といった目的語の状態変化を表す結果構文は成立するのに対し、「彼女自身がクタクタになる」といった主語の状態変化を表す結果構文は成立しないことを示している。「靴を磨いてクタクタになる」ということは、現実世界で起こりえることであるが、このような事態を結果構文の形式で表せないのは、DOR の効果であると言える。

しかし、同じく自動詞を含む文であるにもかかわらず、英語と日本語では以下で示すように、主語叙述が可能になる場合と不可能になる場合がある。こうした事実から、結果構文は非対格性仮説(Unaccusative Hypothesis : Burzio(1986),etc.)の妥当性を示す証拠であり、DOR はそれを支える議論であることが指摘されている(L&RH, Takezawa (1993),etc.)。

(4) a. *The ice cream froze solid.* (非対格動詞)

b. アイスクリームがカチカチに凍った。

c. 冰淇淋冻硬了。

(5) a. \**He ran tired.* (非能格動詞)

b. \*彼はクタクタに走った<sup>5</sup>。

c. 他跑累了。

(6) a. 非対格文 NP<sub>i</sub> [VP t<sub>i</sub> V]

b. 非能格文 NP [VP V]

非対格性というのは、(6)で示したように、伝統的に自動詞と呼ばれるものが大きく非対格動詞と非能格動詞という二つに分類され、それぞれの主語が統語的に異なる働きを持つという考え方である。この仮説によれば、非対格動詞の主語は、非能格動詞や他動詞の主語と異なり、最初の段階(D 構造)では目的語位置にあるが、S 構造に至る派生の過程で主語位置へ名詞句移動されていると考えられている。したがって、DOR を基底構造に関する一般化と見なすなら、非対格動詞を含む(4)において、結果述語が叙述しているのはあくまでも目的語位置に基底生成された派生主語であるため、DOR により、適格文になっていると言える。それに対し、非能格動詞を含む(5a,b)では、結果述語が叙述しているのは D 構造の段階から主語位置に基底生成された名詞句であるため、DOR により、非文になっていると言える。しかし、(5c)で示したように、中国語では英語・日本語と異なり、非能格動詞の場合にも主語叙述が可能となり、見かけ上 DOR に対する反例のように振舞う。

さらに興味深いことに、中国語では表面上主語叙述を許す現象が非能格動詞の場合だけ

<sup>5</sup> 日本語では「走り疲れる」という複合動詞が対応されることもあるが、多くの先行研究では「連用修飾要素+動詞」形式を英語の結果構文との比較対照とするため、本稿もそれに従う。結果の表し方において日本語の複合動詞が通常の結果構文と異なる点については影山(2001)を参照。

ではなく、以下で示すように、一般的な目的語を省略して使う目的語削除動詞や他動詞の場合にも観察される。一方、それに対応する英語と日本語ではいずれも非文となる。

(7) a. \**He drank drunk.* (目的語削除動詞)

b. \*彼はベロンベロンに飲んだ。

c. 他喝醉了。

(8) a. \**He drank the wine drunk.* (他動詞)

b. \*彼は酒をベロンベロンに飲んだ。

c. 他喝醉了酒了。

このように、英語・日本語結果構文の成立には DOR が一般的制約としてはたらいているのに対し、中国語では見かけ上、DOR に違反しているにもかかわらず、適格文となる場合がある。

本稿では以下の要領で議論を進め、上記の表面上主語叙述を許す現象は DOR への真の反例にならないことを示す。まず、中国語結果構文を DOR の観点から論じているものの、上記の主語叙述の可能性を DOR の違反と見なすか否かにおいては、まったく正反対の立場を採っている Cheng&Huang (1994) と Sybesma (1999) を概観し、本稿の立場を明らかにする(3 節)。次に、中国語結果構文における主語叙述の本質を明らかにし、これらは DOR に対する真の反例にならないことを示す(4 節、5 節)。最後に本稿の議論をまとめる(6 節)。

### 3. 表面上主語叙述を許す文に関する従来の分析

#### 3.1 Cheng & Huang (1994) (以後、C&H)

中国語結果構文を一貫して DOR への反例と見なす C&H は、(9) のような一般化を設け、中国語では目的語叙述も主語叙述も許されるとしている。

(9) 結果述語の叙述対象には基本的に直接目的語が選ばれるが、目的語が非指示的 (non-referential) 名詞句、あるいは目的語を伴わない場合は、主語が選ばれる。

a. 小猫咬死了老鼠。 (他動詞)

‘猫がネズミを噛み殺した。’

b. 张三醉倒了。 (非対格動詞)

‘張さんが酔って倒れた。’

c. 他哭累了。 (非能格動詞)

‘彼が泣きつかれた。’

d. 他喝醉了。 (=7c) (目的語削除動詞)

e. 他喝醉了 { \*那瓶酒 / 酒 }。 (\*referential/ non-referential)

‘彼が {あの酒/酒} を飲んで酔った。’

この一般化によれば、(9a)では結果述語の叙述対象として目的語“老鼠”が選ばれ、(9b-d)では表面上の主語“张三/他”が選ばれる。一方、(9e)では通常の予測からすると、目的語が結果述語の叙述対象として選ばれるため、「(あの)酒が酔う」といった意味的におかしい叙述関係が生じてしまい、非文になると考えられるが、C&Hは、目的語が“酒”のような非指示的名詞句になると、指示的名詞句“那瓶酒”の場合と違って、結果述語は例外的に主語と叙述関係を結べるとする。つまり C&H は、中国語では目的語名詞句の指示性の違いによって、結果述語の叙述対象には主語が選ばれることも可能であるとしている。

上記の一般化に基づく、表面上主語叙述を許す(9b-d)と目的語が非指示的名詞句の場合、適格文となる(9e)は、DOR への反例と思われる現象であるが、C&H は、V1 が非対格動詞である(9b)では、非対格性仮説により、結果述語が叙述しているのはあくまでも派生主語であるため、DOR への反例にならないとする。要するに C&H は、前項動詞が非能格動詞、あるいは他動詞の場合、主語叙述を許す文を DOR への反例と見なしている。

### 3.2 Sybesma (1999)

Sybesma は C&H と異なり、中国語結果構文は DOR に従うという立場を採っている。中国語結果構文に結果述語とそれが叙述する名詞句が一つの節を形成するという小節 (small clause) 構造の分析を仮定している Sybesma の枠組では、目的語を伴わない結果構文が一律に非対格構文の構造をもつため、必ず DOR に従うことになる。特に C&H で問題にしていた非能格動詞の場合にも、(10b)で示すような非対格構文の構造を仮定している。

- (10) a. e 醉 [sc 张三 倒了] (非対格動詞)  
 b. e 哭 [sc 他 累了] (非能格動詞)  
 c. e 喝 [sc 张三醉了] (目的語削除動詞)

非能格動詞の場合にも非対格構文の構造を仮定する理由として Sybesma は、中国語では非能格動詞が一定の環境の下、つまり結果述語が付加される場合、非対格動詞に語彙的性質が変わるとする。それを裏づける証拠として、非対格動詞の認定基準とされる「主語の動詞後置可能性」テストをクリアする事実を挙げている。これは以下で示すように、非能格動詞“哭”では、主語名詞の動詞への後置を許さないのに対し、“哭累”になると、非対格動詞“死(死ぬ)”の場合と同様、それが可能になるという事実に基づいている。

- (11) a. 死了 一些 好人。 (非対格動詞)  
 b. \*哭了 不少人。 (非能格動詞)  
 c. 哭累了 不少人 (V1-V2)

### 3.3 本稿の立場

本稿は、上記の表面上主語叙述を許す現象は DOR に対する真の反例にならないことを主張する。DOR を保持する立場を取っている点では、Sybesma(1999)とも一致するものの、Sybesma の分析には問題点が存在すると考えている<sup>6</sup>。Sybesma は、中国語では一定の環境が整えば非能格動詞が非対格動詞にシフトすると主張しているが、こういった主張を通言語学的な観点から評価すると、なぜ同様の事態が英語・日本語では起こらないのか、つまり、中国語では“哭”などの非能格動詞に結果述語が付加される場合、非対格動詞としても用いられるのに対し、これに対応する英語の“cry”や日本語の「泣く」等では、それが不可能である、という問題が生じてしまう。

そこで本稿では、Sybesma の非対格性の分析とは異なり、表面上主語叙述を許す現象が以下のような特徴を持つため、DOR への真の反例にならないと主張する。以下では、議論の便宜上、結果構文を表面上の目的語名詞句の有無によって他動詞結果構文と自動詞結果構文に分けることにする。

- (12) a. 他動詞結果構文において主語叙述を許す現象は、固定された表現としての特徴を持っており、あくまでも例外的なものである。  
b. 自動詞結果構文において主語と叙述関係を結んでいるように見られる現象は、実は結果述語が目的語の位置にある音形を持たないゼロ代名詞と叙述関係を結んでいる。

## 4. 他動詞結果構文における主語叙述の本質

本節ではまず、C&H の主張に対する反例を指摘し、他動詞結果構文において主語叙述を許す現象はあくまでも例外的なものであることを示す。

### 4.1 C&H の主張に対する反例

C&H は、主語叙述を許す現象として以下のようなものを挙げている<sup>7</sup>。

- (13) a. 他吃饱了饭了

<sup>6</sup> Sybesma(1999)の分析には以下の問題点も存在する。Sybesma は、主語叙述を許す以下の他動詞結果構文では、結果述語が二項述語であるという特性を持つため、(ib)のような非対格構文の構造を仮定することができ、DOR への反例にならないと主張する。しかし次の4節でも述べるが、本稿ではSybesmaの挙げている(ia)は不自然であると考えており、また、結果述語“饱”が“我饱了土豆”といった他動詞文で生起できないことから結果述語を他動詞と見なし、(ib)のような構造を仮定することには問題があると考えている。

(i) a. 我吃饱了土豆。 (私はジャガイモを食べてお腹いっぱいになった)

b. e<sub>i</sub> 吃 [sc 我<sub>i</sub> 饱 土豆] -Sybesma(1999:52)

<sup>7</sup> 後項動詞が一贏(下贏), 一會(唱會)のような二項述語である場合は一見主語叙述が可能になるように見えるが、Lin(2004:97)は、これらの複合動詞の現れる文は原因-結果の因果関係を含む真の結果構文と違って単に時間的な前後関係(temporal precedence)を表すとし、これらを擬似結果構文(Spurious Verbal Compounds)と呼んでいる。V<sub>2</sub>が二項述語であるこれらの現象については、結果構文の定義と関連付けて更に検討する。

‘彼はご飯を食べてお腹いっぱいになった。’

b. 他喝醉了酒了。 (=8c).

(14) 他骑累了马。

(i) ‘彼は乗馬して疲れた。’

(主語叙述)

(ii) ‘彼が馬に乗って、馬が疲れた。’

(目的語叙述)

C&H は、上記の文において主語叙述が許されるのは、目的語が非指示的名詞句として解釈されるためであると主張している。特に、解釈の曖昧性をもつ(14)では、目的語“马”が表面的には非指示的であるが、特定の馬を言及する指示的名詞句としての読みも可能であるため、前者の場合は「彼が乗馬して、彼が疲れた」のような主語叙述の解釈となり、後者の場合は、「馬が疲れた」のような目的語叙述の解釈になるとする。

ここで、もし(14)についての C&H の分析を単純に受け入れると、中国語では目的語が裸名詞の場合、結果述語の叙述対象は常に曖昧であり、どちらの解釈が選ばれるのかは文脈によって決定されることになることが予想される。しかし、(15)(16)で示すような例では、目的語名詞句の指示性の違いに関わらず、いずれも主語叙述は不可能である。

(15) 我砍倒了树。

(i) ‘私が木を切って、木が倒れた’

(目的語叙述)

(ii) \*‘私が木を切って、私が倒れた’

(主語叙述)

(16) a. \*他吃胜了 {肉 / 三公斤肉} 。

‘彼は {肉/3 キロの肉} を食べて太った。’

b. \*他写累了 {书 / 这本书} 。

‘彼は {本/この本} を書いて疲れた。’

(15)における目的語“树”は裸名詞であるため、C&H の分析からすると解釈の曖昧性が生じると予想されるが、(15)では「私が倒れる」という主語叙述の解釈はありえず、必ず「木が倒れる」といった目的語叙述の解釈が得られる。また(16)における目的語“肉、书”は、数量詞或いは指示詞の修飾を受けた“三公斤肉、这本书”と違って、非指示的名詞句として解釈されるにも関わらず、主語叙述は不可能となる。

## 4.2 固定表現としての特性をもつもの

本稿では、(13)(14)において主語叙述が許されるのは、目的語名詞句の性質のみでなく、“吃饱饭”“喝醉酒”“骑累马”が固定された表現としての特性をもつためであると考えている。これは以下で示すように、構成要素を他の要素に置き換えたり、また構成要素の語順を入れ替えたりすることが不可能である事実から裏付けられる。

まず、目的語、あるいは結果述語を他の要素に置き換えると、“吃饱饭”“喝醉酒”では非

文となる。一方、“骑累马”では、主語叙述の解釈が基本的に得られなくなる。

- (17) a. 他吃饱了 {饭 /\*肉/\*面条} 了。  
'彼は {ご飯/肉/麵} を食べてお腹いっぱいになった。'
- b. 他喝醉了 {酒 /\*啤酒/\*白酒} 了。  
'彼は {お酒/ビール/白いお酒} を飲んで酔った。'
- c. 他骑累了猪<sup>8</sup>。  
(i) '彼が豚に乗って、豚が疲れた' (目的語叙述)  
(ii) ? '彼が豚に乗って、彼が疲れた' (主語叙述)
- (18) a. 他吃 {饱/\*胖} 了饭了。  
'彼はご飯を食べて {お腹いっぱいになった/太った}'
- b. 他骑瘦了马。  
(i) '彼が馬に乗って、馬の足が不自由になった' (目的語叙述)  
(ii) \* '彼が乗馬して、彼の足が不自由になった' (主語叙述)

次に、目的語を動詞に前置させる BA(把)構文の形式、あるいは受動文にすると、“吃饱饭”“喝醉酒”では非文となる。一方、“骑累马”では主語叙述の解釈が得られなくなる。

- (19) a. \*他把饭吃饱了。 (BA 構文)  
b. \*饭被他吃饱了。 (受動文)
- (20) a. \*他把酒喝醉了。 (BA 構文)  
b. \*酒被他喝醉了。 (受動文)
- (21) a. 他把马骑累了。 (BA 構文)  
'彼が馬に乗って、馬が疲れた。'
- b. 马被他骑累了。 (受動文)  
'馬は彼に乗られて疲れた。'

上記の文のもつ特殊性については、すでに多くの言語学者によって注目されてきた。特に、“吃饱饭”“喝醉酒”における目的語が総称的名詞句に限られ、他の類似した意味を表す名詞句との置き換えが不可能であることから、これらの表現を慣用句と見なす研究者もあり<sup>9</sup>、実際 Huang&Lin(1992)は、これらの表現は辞書(Lexicon)に記載されるべきものであ

<sup>8</sup> Lin(2004:126)。Cheng(1997)は“骑累马”において主語叙述を許す解釈は、特定の方言話者に限られるもので、大多数の母語話者は目的語叙述の解釈しか許さないと指摘している。

<sup>9</sup> Huang&Lin(1992)、Shi(2002)。また、上記の表現が「把」構文、あるいは受動文に変換されると非文になることから、この場合の“饭、酒、马”は真の目的語ではなく、V1に編入され、「食事する、飲酒する、乗馬する」といった動作を表していると考えられることもできる。一般的に、動詞“吃、喝”の対象として選ばれやすいのは“饭、酒”であり、また動物に乗るとしたら“马”が“骑”の対象として選



ると主張している。同様に、解釈の曖昧性をもつと指摘されている“骑累马”においても、(17c)で示したように、目的語を他の名詞句に置き換えると主語叙述の解釈が得られないことから、これも固定された表現であると考えられる。

このように、主語叙述を許す(13)(14)が通常他動詞結果構文と異なり、上記で示したような固定された表現としての特性を持つことから、本稿ではこれらの表現に統語的な操作をかけることができないと考えている。したがって、DOR の制約を受けないのであって、これらはいくまでも固定表現における DOR の例外と見なすべきである。

## 5. 自動詞結果構文における主語叙述の本質

表面上目的語を伴わない(22c)は、自動詞結果構文に分類されるが、英語と日本語ではこのタイプの結果構文が DOR により排除されるのに対し、中国語では適格文となる。

- (22) a. \**He ran tired.* (=(5))  
b. \*彼はクタクタに走った。  
c. 他跑累了。

本稿では、見かけ上主語叙述を許し、DOR への反例と見られる上記の現象では、実は(23)で示すように、結果述語が目的語の位置にある主語と同一指示である音形を持たないゼロ代名詞と叙述関係を結んでおり、DOR には違反していないことを提案する。

- (23) NP<sub>i</sub> V1-V2 e<sub>i</sub>

### 5.1 提案を支持する証拠

まず、本稿の提案を支持する証拠である見せかけの目的語生起に関する事実を挙げ、これは Burzio(1986)の一般化によって保証されることを示す。次に、見せかけの再帰目的語の生起において英語と中国語に見られる違いは、ゼロ代名詞の許容可否の違いに還元できることを示す。

#### 5.1.1 見せかけの目的語 (fake object)

英語と中国語では、以下で示すように、本来目的語を取らないはずの自動詞も、これらの動詞によって厳密下位範疇化されない見せかけの目的語を伴って、見かけ上は他動詞的に振舞うことができる。それに対し、日本語ではこのタイプの結果構文が成立しない<sup>10</sup>。

---

ばれやすい。よって、“他吃饱了，他喝醉了，他骑累了”では、文脈の支えがなくても、省略された目的語が“飯，酒，马”であることが分かる。

<sup>10</sup> 影山(1996,2001)、Washio(1997)によって指摘されているように、日本語は英語と異なり、結果構文を構成する動詞に厳しい意味的制限が課せられており、基本的に状態変化動詞に限られ、非能格動詞や変化を含意しない他動詞では結果構文が成立しない。詳細は先行研究を参照のこと。

- (24) a. She cried *her eyes red*.  
 b. 她哭红了眼睛。  
 c. \*彼女は目を赤く泣いた。
- (25) a. They drank *the teapot dry*.  
 b. 他们喝干了茶壶。  
 c. \*彼らはティーポットをカラカラに飲んだ。

(24)の“her eyes/眼睛”や (25)の“the teapot/茶壺”が、“\*He cried her eyes/\*他哭了眼睛”や “\*they drank the teapot/\*他喝了茶壺”と言えないことから、これらは動詞によって厳密な下位範疇化されない見せかけの目的語であることが分かる。特に“drink”は、もともと液状のものを目的語として取る他動詞であるが、(25)のように、見せかけの目的語を伴う場合は、一般的な目的語(*unspecified object*)を省略して使う他動詞の自動詞用法と解すべきである。

自動詞は通例、目的語に格を付与できないため、(24a,b)(25a,b)は「音形をもつ名詞句は、格を持たなければならない」という格フィルター(Chomsky 1981)により、排除されると思われるが、L&RH は、英語においてこのタイプの結果構文が許されるのは、Burzio(1986)が提案した(26)のような一般化に従っているためであるとする。つまり、この一般化によれば、“cry”や“drink”は、主語に意味役割(動作主)を付与する動詞であるため、目的語に対格を付与することができ、よって格フィルターが満たされ、適格文になると考えられる。このことを裏返しに言えば、主語に意味役割を付与できない非対格動詞では、基本的に見せかけの目的語を伴う結果構文が成立しないという予測が立てられる。(27)で示すように、これは正しい予測である。

- (26) Burzio の一般化：主語に意味役割を付与できる動詞のみが、目的語に対格を付与することができる。
- (27) a. \*The lake froze the fish to death.  
 b. \*湖水冻死了鱼。  
 ‘湖が凍り付いて魚が死んだ。’

このように、見せかけの目的語の生起において中国語も英語と同様の振る舞いを見せることから、中国語においてこのタイプの結果構文が許されるのも、Burzio の一般化によって保証されるためであると考えられる。

### 5.1.2 見せかけの再帰目的語 (*fake reflexive object*) とゼロ代名詞

ここで再び本稿で問題にしている(22)のタイプの結果構文に立ち戻ると、英語では以下で示すように、目的語の位置に主語と同一指示である再帰代名詞を補うと、適格文となる。

(28) a. He ran *himself* tired.

b. \*彼は(自分自身を)クタクタに走った。

(29) a. He drank *himself* into a stupor.

b. \*彼は(自分自身を)グデングデンに飲んだ。

Simpson(1983)は、英語では結果述語で表わされる状態に変化する対象が既に主語位置にあるにもかかわらず、目的語の位置に再帰形として再度具現化されなければならないことを指摘し、この場合の“*himself*”を見せかけの再帰目的語と呼んでいる。英語の結果構文の成立に、この種の形式的操作が要求されるということが DOR の妥当性を示していると言える。

それに対し、中国語ではこの種の形式的操作が義務的ではないものの、以下で示すように、再帰代名詞を補うことも可能であり<sup>11</sup>、また主語と同一指示でない他の名詞句を見せかけの目的語として生起させることも可能である。表面上主語叙述を許すように見られる自動詞結果構文においても、目的語の位置に名詞句が生起できる特徴を持つことは、本稿の提案に対する強力な経験的証拠になると考えられる。

(30) a. 小王咳嗽醒了。

b. 小王咳嗽醒了 他自己。

(cf. 小王把 自己 咳嗽醒了)

‘王さんは咳き込んで、彼自身が目を覚ました。’

c. 小王咳嗽醒了 李四。

(cf. 小王把 李四 咳嗽醒了)

‘王さんが咳き込んで、李さんを起こした。’

(31) a. 他哭 {累 / 醒} 了。

b. 他哭 {累 / 醒} 了 他自己。

(cf. 他把 自己 哭 {累/醒} 了)

‘彼が泣いて彼自身が {疲れた/目を覚ました。’

c. 他哭醒了 妈妈。

(cf. 他把 妈妈 哭醒了)

‘彼が泣いてお母さんを起こした。’

(32) a. 我讲烦了。

b. 我讲烦了 我自己。

(cf. 我把 自己 讲烦了)

<sup>11</sup> 再帰代名詞が生起することによって、結果述語の表す状態になるのは「他の人ではなくて」というコントラストの意味を伴うこともあるが、本稿にとって重要なのは、中国語においても英語と同様、目的語の位置に主語と同一指示である再帰代名詞が生起できるという事実である。再帰代名詞の生起するデータは、马希文(1987:432)、Lin(2004)にも見られる。Lin は、中国語結果構文が DOR に従わないという立場を採っているが、その中で“吃饱”の場合、再帰代名詞が生起不可能であることを指摘している。本稿では、“吃饱”の場合、再帰代名詞が生起不可能なのは、4節で見たように、固定された表現を構成する総称的名詞句がすでに目的語の位置を占めているためであると考えており、よって本稿の提案に対する反例にはならないと考えている。

(i) a. \*张三吃饱了自己。 (Zhangsan が何かを食べて、自分自身がお腹いっぱいになった)

b. 李四跑累了自己。

c. 我笑死了自己。

-Lin(2004:103)

‘私は何かを話して、私自身がうんざりした。’

c. 我讲烦了李四。

(cf. 我把李四讲烦了)

‘私が何かを話して、李さんをうんざりさせた。’

見かけは自動詞結果構文のように振舞う(30a)-(32a)は、実は(30b,c)-(32b,c)で示したように、目的語の位置に主語と同一指示である再帰代名詞や他の名詞句が生起できる特徴を持っており、他動詞結果構文と同様の振る舞いを見せることが分かる。また、目的語が主語と同一指示でない(30c)-(32c)では、結果述語の叙述対象としていずれもその目的語が選ばれる。

ここで、もし中国語においても再帰代名詞の生起が可能であるとすると、英語では(28)(29)で示したように、再帰代名詞の生起が義務的となるのに対し、なぜ中国語では随意的となるのかが問題となる。本稿では再帰代名詞の生起において英語と中国語に見られる違いは、ゼロ代名詞を許容するか否かという違いに還元できることを提案する。これは、Huang(1984,1987,1991)Xu(1986)徐(1994)によって指摘されているように、中国語が英語と違って主語や目的語といった項が顕在化する必要がないという事実に基づいている。

(33) a. 张三批评过自己 吗。

b. e 批评过 e. /他批评过 e.

b'. e e 批判したことがあるよ。/彼は e 批判したことがあるよ。

(34) a. Has Zhangsan criticized himself.

b.\* e has criticized e. /\* Zhangsan has criticized e. (cf. He has criticized himself.)

(33)と(34)の対比から分かるように、中国語では英語の“he/himself”に対応する代名詞が顕在化されなくても適格文となるのに対し、英語では常に音形のある代名詞で表現されなければならない。

中国語が英語と異なり、再帰代名詞の省略を許す<sup>12</sup>ことから、本稿では、見かけ上主語

<sup>12</sup> Huang(2006)は、本稿の提案でもある崔(2005)について、中国語では目的語位置における再帰代名詞の省略に一定の制約があるため、非能格動詞に基づく結果構文に null reflexive object を仮定することには理論的に問題が生じると指摘している。Huang(1984,1987,1991,2006)は、一貫して文脈の支えがある場合のみ主語と同一指示をもつ再帰代名詞の省略が可能であるとし、(33)のような文において再帰代名詞が省略できるのは、“张三批评过自己吗”という先行文脈の中ですでに“自己”が出ているためであるとする。しかし、Huang(2006)は、理論的に null reflexive object を仮定することには問題が生じると指摘しているものの、なぜ本稿の提案を支持する(31a)-(34a)のような例文においては、文脈の支えがなくても再帰代名詞の省略が可能であるのかという問題については言及していない。

すでに、Xu(1986)徐(1994)においても本稿と同様の主張がなされている。Xuは、以下のような例文を挙げ、文脈の支えがなくても動詞の語彙的特性により、再帰代名詞の省略は可能になるとする。例えば、動詞“吹嘘(ほらを吹く)”は、その語彙的特性により、“吹嘘”の対象になりえるのは、常に“自己”であるため、文脈の支えがなくても再帰代名詞の省略は可能であるとする。一方、動詞“批评(批判する)”では、“批评”の対象になりえる人物が自分以外にも数多くいるはずで、“自己”を目的語としなければならない必然性はあまり高くないため、再帰代名詞の省略は文脈の支えが必要であるとしている。

(i) a. 张三常常吹嘘自己。

b. 张三<sub>i</sub>常常吹嘘 e<sub>i</sub>

と叙述関係を結び、DOR への反例と見られる現象は、実は(23)で示したように、結果述語が目的語の位置にある主語と同一指示をもつ音形を持たないゼロ代名詞と叙述関係を結んでおり、DOR は満たされていると考える。

## 6. まとめ

本稿では、英語・日本語との比較を通じて、主語叙述を許すと指摘されている中国語結果構文が DOR に対する真の反例にならないことを主張した。まず、他動詞結果構文において主語叙述を許す現象は、固定化された表現としての特性を持っており、あくまでも DOR に対する例外であることを示した。次に、主語叙述を許すように見える非能格動詞を含む結果構文は、実は他動詞結果構文と同様の振る舞いを見せることを示し、また英語と異なり、再帰代名詞の生起が随意的となるのは、中国語がゼロ代名詞を許容する言語であるためであることを提案した。したがって、結果述語と叙述関係を結ぶのは、実は目的語の位置にある音形を持たないゼロ代名詞であり、DOR が満たされていると考えられる。

### 【参考文献】

- 影山太郎(1996) 『動詞意味論』 くろしお出版
- 影山太郎(2001) 「結果構文」『動詞の意味と構文』大修館, 154-181
- 崔玉花(2005) 「中国語結果構文と直接目的語制約」『日本中国語学会全国大会予稿集』 158-162
- 齊木美知世(2004) 「結果表現の類型論」『次世代の言語研究Ⅲ』筑波大学現代言語学研究会
- 竹沢幸一(2000) 「空間表現の統語論—項と述部の対立に基づくアプローチ—」『空間表現と文法』青木三朗・竹沢幸一(編) くろしお出版, 163-214
- 馬希文(1987) 「与动结式动词有关的某些句式」『中国语文』第6期, 424-441
- 徐烈炯(1994) 「与空语类有关的一些汉语语法现象」『中国语文』第5期, 321-329
- Burzio, Luigi(1986) *Italian Syntax: A Government and Binding Approach*. Reidel.
- Carrier Jill and Janet Randall (1992) "the Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives," *Linguistic Inquiry* 23, 173-234.
- Cheng, Lisa Lai-Shen (1997) "Resultative Compounds and Lexical Relational Structures,"

---

本稿も Xu と同様、文脈の支えがなくても再帰代名詞の省略は可能であると考えているが、本稿で挙げているデータは、また、Xu の指摘している「動詞の語彙特性による“自己”の省略」とは性質の異なるものであると考えられる。それは(30)・(32)で示したように、省略された目的語の位置には再帰代名詞だけでなく、他の名詞句も生起可能である事実から裏付けられる。つまり、動詞の表す行為の結果、結果述語で表される状態に変化する対象は、主語と同一指示の“自己”だけでなく、自分以外の他の人である可能性もある。このように、再帰代名詞の省略はかなり複雑な問題を含んでおり、これらは明らかに目的語の位置に現れる空範疇が常に文脈の中で先行詞をもつ変項(variable)であるという Huang の主張では説明できない現象である。上記のような目的語の空範疇がどういった性質を持ち、Chomsky (1981)の提案した4つの空範疇とどう関わっているのか、という問題については今後の課題にする。

- 『中国境内語言暨語言学』3, 167-197.
- Cheng, Lisa Lai-shen and C.-T. James Huang (1994) "On the Argument Structure of Resultative Compounds," in Matthew Chen and Ovid Tzeng (eds.) *In Honor of William S. Y. Wang: Interdisciplinary Studies on Language and Language Change*, 187-221, Pyramid Press, Taipei.
- Huang, C.T.J. (1984) "On the Distribution and Reference of Empty Pronouns," *Linguistic Inquiry* 15, 531-574.
- Huang, C.T.J. (1987) "Remarks on empty categories in Chinese," *Linguistic Inquiry* 18, 321-337.
- Huang, C.T.J. (1991) "Remarks on the status of the Null Object," in Robert Freidin ed. *Principles and Parameters in Comparative Grammar*. Cambridge: MIT Press, 56-76.
- Huang, C.T.J. (2006) "Resultatives and Unaccusatives: a Parametric View," 『中国語学』253, 1-43.
- Huang, Chu-Ren and Fu-Wen Lin (1992) "Composite Event Structures and Complex Predicates: A Template-Based Approach to Argument Selection," *Proceedings of the third Annual Meetings of the Formal Linguistic Society of Mid-America*, 90-108.
- Koizumi, Masatoshi (1994) "Secondary Predicates," *Journal of East Asian Linguistics* 3, 25-79.
- Lin, Jimmy (2004) *Event Structure and the Encoding of Arguments: The syntax of the Mandarin and English verb Phrase*. Doctoral dissertation, MIT.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (2001) "An Event Structure Account of English Resultatives," *Language* 77, 766-797.
- Shi, Yuzhi (2002) *The Establishment of Modern Chinese Grammar: The formation of the resultative construction and its effects*, John Benjamins.
- Simpson, Jane (1983) "Resultatives," in Lori Levin et. Al. (eds.), *Papers in Lexical-Functional Grammar*, 143-157, Indiana University Linguistics Club.
- Sybesma, Rint (1999) *The Mandarin VP*, Kluwer Academic Publishers.
- Takezawa, Koichi (1993) "Secondary Predication and the Goal/Locative Phrases," In *Japanese Syntax in Comparative Grammar*, ed. Nobuko Hasegawa, 45-77, Kuroshio.
- Washio, Ryuichi (1997) "Resultatives, Compositionality and Language Variation," *Journal of East Asian Linguistics* 6, 1-49.
- Xu, Liejiong (1986) "Free empty category," *Linguistic Inquiry* 17, 75-93.
- Zhang, Niina (2001) "The Structures of Depictive and Resultative Constructions in Chinese," *ZAZ Papers in Linguistics* 22, 191-221.